

残夢

町田 大介

初めはぼんやりとした夢であったが
何度も登場して、心の中に住み着いてしまった
夢は不思議である
時々出会う苦しみや悲しみを包み込み
勇気さえ与えてくれた
そして、ある時からその夢に向かって
懸命に自分を追い込んでいくと
その夢が現実のものとなることがある

高校時代に夢見た《シルクロードの旅》が私の《夢》実現の例である。今から二十七年前になる。この度、その時のツアーで意気投合し、その後も何度か会う機会があった北村一郎氏が亡くなった、九十四歳の大往生であった。私は、北村氏の思い出を『元陸軍大尉と数百のマッチ箱』と題して二十五年前まとめていた。この度それを思い出し、なお数名の《シルクロードの旅》にかけた夢《》を書き足し、読者に読んでもらいたいと思う。情景や人々の暮らしは今では想像できない。中国の変化は、地方でも半年、一年で大変革を遂げる。そのことをご承知願いたい。

元陸軍大尉と数百のマッチ箱

「甘新道路」は広大なゴビタンのほぼ真ん中を走っていた。日本の地図や案内書では「ゴビ砂漠」と記しているが、実は砂漠ではなく、《礫》と言われる土の上に、

トゲを持ったラクダ草などが生い茂り、しかも所々に水が流れ、かなりの広さの池が存在していて、その事実には内村和己はショックを受けていた……年間雨量が数十ミリ程度と云われているが、だが強烈な太陽によつて乾き切った大地の中に「伏流水」が存在し、時と場所によつて「伏流水」が地表に姿を現し、川や池を形成する。その自然の力と、その妙に感じ入っていた。

行き交う車はほとんど無く、ゴミに響く音は、唯一灼熱と格闘しているツアーバスエンジン音だけだった。頭上と地上からの熱射はクーラーの冷気をたちどころに薄めてしまい、旅行者の誰もが蒸し暑さに耐えるために目を閉じていた。内村は、冷気の噴出し口から遠い最後尾左側で荒野を見つめていた……バスが一時間以上走っても、車窓からの光景は変化せずいたが、≪シルクロードの旅≫を夢見た日々を思えば瞬間が大切に思えて、眠るのが惜しかった。

先程、地平線近くに塔のようなものに見えたものが、近づくにつれて崩れた見張り台の名残と分かり、その先に少し高い丘があり、またその先には何らの目立つものが無く、ただ一直線の道が続いていた。突然鳴り響いた激しいクラックションに、目を閉じていたツアー客の大半は驚き、車窓を見渡し異常を探した。すかさず「ロバです」とガイドの劉が言うのを聞いて、目を覚ました大半は「ああ驚いた」と言いながらまどろみに戻っていった。バスが追い抜いたロバが引く荷車には一人の男が乗っていた……ゴビタンの真ん中を、男はどこから来てどこに向うのだろう……荷車はたちどころに小さくなっていったが、彼の行く先、住まいの近くにはオアシスがきつとある筈だ。それはオアシスと云うよりかちいさな水溜りかもしれない。灰色の原野、赤ちやけた岩肌、うんざりするそれらの連続のなかに緑の草が現れ、羊やロバたちが草を食べ、その傍で子供たちが家畜の番をしているかもしれない。それこそ古から続いているオアシスの光景だ。

内村がオアシスの情景を心に描いていた時、一つ前の座席で眠っていた北村一郎がうめき声を発した。それには苦悶と悲しみが混じっていた。

六十五歳の北村一郎は茨城県で農業を営んでいる。幼い時からの友人である林田國男とこのツアーに参加してきた。口数の少ない人である。が、中国人に対しては別であった。旅行の二日目、西安のホテルで気付いたのであったが、服務員（従業員）に中国語で話しかけていた。蘭州や柳園でも、食堂や休憩所でさっと席

を外し、服務員達に話しかけ、会話にゆきづまると、メモ用紙に漢字を書き交流しているのだ。

実は、内村和己は北村一郎に誘われて西安のホテルで飲む機会があった。北村は日本から持ち込んだ缶ビール十個を、ホテルの服務員を口説き、冷蔵庫で冷やしてもらっていた。当時、中国ではまだ冷蔵庫の普及がそれ程ではなかった。町の食堂でも冷やしたビールは皆無だった。兵馬俑等の見学に疲れた内村達五名は、大喜びで招待に応じた。コップを重ねているうちに、北村一郎は向かいの席にいた内村に自らの前歴を語った―自分は元陸軍大尉で、しかも、中国中部戦線(中支戦線)に派遣されたと告白したのである……穏やかな口調の中に苦渋をにじませ、中国侵略の先兵として消しがたい罪を犯したことの反省……そのように自分を駆り立て、強いて、青春を奪ったその怒りをどこにぶつけたらよいのか！を語ったのであった。

前歴を告げられた内村は会話に窮した。この老人が中隊を指揮し、その手で中国人を殺したとは信じられなかった……信じたくなかった……自分は学生運動の経験があり、現在も《アウトサイダー的な生き方》をして、旧日本軍の行爲を糾弾する側にいる自分の《対極》にいると思った。

北村の隣の席に林田國男が来て、白酒を注文することになった。深刻かつ重たい会話から逃れたが、この続きは旅行中にきつと行われるだろう。内村和己はふっと思い出した。前日、上海から西安に向かう機内の会話だった……隣の席に三十代中頃の男が座っており、上手な日本語で、北京大学の日本語学科教授と名乗り、続いて質問した。「日本の作家たちの中で、なぜあんなに自殺者が多いのですか？ 中国の作家には自殺者はおりません―自分はどうなった。そして前半の問いに答えるべきか、《老舎は自殺したのでは……》と切り返すべきか迷ったのだった。挙句に、「日本の作家の弱点は、哲学の欠如社会性の無さです」と。その若き教授との会話は、自分が提起する形で、前の年、中国、韓国、アジア各地で起こった『日本の教科書問題』だった。日本人の歴史認識が、中国、韓国、アジア各地で懐疑的に見られていることだ。小さなグループや個人レベルで、元日本軍の虐殺、虐待を悔い、告白・反省を行っているが、余りにも小さい。国として反省が求められているのだ！

それから、内村は北村一郎を憎むどころか徐々に親しみを感じるようになって

いった。

北村一郎が、西安空港の手荷物検査で百個近いマッチを押収された。そのことを内村は二日後の列車の中で聞いた。列車食堂で会った時、その事実を確かめたら「失敗したね。検査の兵隊もびっくりしていたよ。でも、大型トランクにはまだ二百個ぐらいあります」と元気よく語った。

「飛行機を燃やすに十分なマッチを何に使うのですか？」この質問は野暮であった。シルクロード奥地で、笑いながらもなかなか近づかない小年や大人の人々に、少し前かがみになり、こちらから近づき、マッチ箱を配って歩く北村老人……内村は巡礼者のそれを見た。

内村が回想を続けていた時、ガイドの劉が叫んだ「さあ皆さん！『蜃気楼』です」車内にざわめきが起こり、一斉に左側の窓辺に身を寄せていった。

砂の中の儀式

刷毛で丁寧に刷き清められたような砂の斜面……そこに足を踏み入れるのが悪いような気がする。だが、太陽が沈む瞬間を『鳴砂山』頂上で見たい、という願いと、もう一つの目的が勝った。一步登るごとに足が砂に入り込み、遠慮なく穴を造っていく。小林哲子は誰よりも早く頂上を目指した。

夕日は、地平線に沈むための速度を速めながらも待っていてくれた。眼下にオアシスの全景……ラクダが列をつくってゆっくり歩いていく……そう！ここは夢の地！

小林哲子は旅先で、夕暮れを迎えると胸が熱くなるのを覚える。山登りにしばし出かける哲子は、岐路の車中から夕暮れの光景に出会うと、同行者との会話を切ってしまい、視線を車外に向けたまま黙ってしまうのだった……車窓に展開する、灯りをつけ夕餉の準備を始めた家々。その電灯を目指して子や父を望見すると、言いようのない感傷に襲われてしまうのだ。

今、どこを見ても家々の灯りは見えないし、家路に着く子や父の姿も見えない……だが、いつもの感傷が出かかってきた……いけない！ツアーの人たちが到着する前に、旅の目的を実現しておかねば……

哲子は皆が登ってくる反対側の、頂上よりやや下がった所で、サブザックの中から旅行用の小物入れを出し、さらにその中からケースに入った写真とゼロハン

紙に包まれた少量の灰を取り出した。残雪の頂上に立つ兄・小林武の写真……この写真が一番兄らしいと思う……少女趣味かも知れないが、兄自身の願いと、哲子の兄への思いを永遠にするためにこの地に遺灰を収めたいの……一度は、兄の住んでいたアバートの写真の場所・嘉峪関を考えたが、城壁はダメだったし、周辺の適当な場所を探す時間がなかった。今考えると『鳴砂山』でよかった。

ツアーの先行数名が頂上に到着したので、哲子は、手早く兄の写真を砂で固定し、その前に遺灰を丁寧に巻き、その上に砂の覆いをした。そして小声で「神よ！兄・武の魂を天国にお導きください」と唱えて十字を切った。

お兄さんの詩がまた出てきた……哲子はこの詩がとても好きです……でも涙がすぐ出てきてしまうの……

一九七〇年と八〇の狭間にて

私たちの出会いがあった

私たちには共通の歩みが創った言葉がある

私たちには生きる内容をめぐり闘った

闘った故に厳しかった

厳しかった故に怒った

怒った故に涙した

涙した故に笑った

君は誰よりも笑いが豊だった

君にはAdiosではなくSee Youと言うつもりだ

哲子は鮮明に覚えている……七九年十二月の第一日曜日、『ラグビーの早明戦』が行われた日、兄妹揃って観戦し、その岐路、青山通りのケーキ店に入った。八割方若い女性客の中に『兄妹』のカップルであった。よくよく観察すれば兄妹と見破る人たちがいるかもしれないが、哲子は若い女性客の羨望の視線を感じたのである。久しぶりの兄は多弁で、今日行われた早明戦の勝敗の分かれ目を例に、『ラグビー論』を展開したが、初めて生の戦いを見た哲子は聞き役に徹した。でも楽しく、嬉しいひと時だった。

兄は、大学紛争―安保闘争―沖縄返還闘争へと続く激動の中で、活動に身を投

じ、逮捕歴も重なり、家族の板挟みの選択として家を飛び出した。まだ中学生になつたばかりの哲子は、両親と兄が激論している中に入れず、傍でオロオロしたことを覚えていいる。一連の紛争、闘争が圧倒的国家権力に押さえられ、新左翼組織も弱体化していき、兄は、T市の清掃職員になり両親を安心させた。でも、家に戻らず、活動も三里塚闘争や狭山闘争に参加していたようであった。哲子は別れる前に、家に戻ることを勧めようとしたが、それを見越したように、兄は、「次の約束がある」と立ち上がり、「この本を読みたまえ」と、ヘイン著『シルクロード』であった。兄が北アルプス・鹿島槍ヶ岳で遭難したのは翌年三月二十二日であつたが、兄の死を聞いてとつさに思い出したのが、兄の勧めた本であつた：一度も開く機会がなかった本の最後の余白にこの詩があつた。兄の字に間違いなかつた。『君とは誰だろう』と、知っている兄の友人に訊ねもしてみたし、『小林武を偲ぶ会』に家族として参加し、それらしい人を探ってみたが判らなかつた。

兄への想いを永遠なものにするという、哲子にとって厳粛な儀式を済ませた直後、哲子に一人の男が近づいてきた。内村和巳だった。内村のかもしれない気が兄と似ている。微笑しながら近づいてきた内村は、哲子の目と頬に涙の跡を見出し、当惑した。だが決意したように口を開いた。

「お兄さんを想い出していたのですか？」

「えっ。そう言えば、どこかでお目にかかつたような？」

「ええ、『小林武君を偲ぶ会』にできました。成田のロビーで小林君の妹さんと気が付きました。今まで、自己紹介の機会を待っていたのです。…お兄さんとは大が違いましたが、所属するグループは同じでした。二、三回徹夜で飲んだ仲です」

旅行初日から、小林武―妹の関係を知っていた内村が、今日まで、名乗りをあげずにきたのはなぜだろう？ そんな疑問をもった哲子だったが、

「人生ってこんなものですか…。」と、冷静に受け答えた。内村は足元の砂を一つ掴みして、それを顔の高さまで上げて、ゆつくりと少しずつ地上に戻しながら言つた。

「小林君の書いた論文がありますよ…：七十年に書いたものです。戦後の階級闘争のなかで、天皇制がどう捉えられたかの研究論文です。よく書けています。必

要でしたら、帰国次第、すぐ送ります」

「ありがとうございます。父が、直後の悲しみのあまりそれらしい印刷物まで燃やしてしまつて……お願いします」

「小林君がこんなことを言っていました……『僕が学生運動をすることになったキツカケはごく単純でした。クラス討論会が開かれた場に、地方出身の女性が、地方なまりで、キャンバスに水道の蛇口が少ない……この発言に感心し、自らクラス委員に立候補して大学当局とやりあいました』……学生生活家と称される者達の、活動の動機は案外こんなものです。あつ！　こんな話ばかりしてしまつて。そろそろ下山です。又、この旅行中、お兄さんの話をする機会があるでしょう」内村は、哲子の肩をポンとたたいて、ツアーの一行に合流していった。

気が付けば、太陽は地平線に姿を消すための、最後の輝きを放っていた。

背 中

『シルクロードの旅は、まだまだ冒険の要素が多いのです』と指摘した、ガイドの劉　宏光の言葉が現実のものとなった。

鳴砂山を降りた所に池があり、そこからバスが止まっているところまで、ツアーメンバーの六名が駱駝乗りに挑戦した。宮城夏代もその一人であった。彼女は馬に三回乗ったことがあったが、駱駝は別であった。高さが馬より数十センチ高く、二メートルを超えると怖くなる。揺れも激しい。そして、駱駝は体に似合わず臆病であった……小さな部落の入り口で、男の子が、駱駝の手綱を引いていた人に声をかけた……多分父親であつたろう。あたりは薄暗闇で、突然の声に驚いた駱駝は大きく飛び跳ねて宮城夏代は振り落とされた。

自力で歩けない宮城夏代を、内村和巳が背負つてバスに向かった。途中、夏代は涙した。ケガの痛さもあつたが、内村の背中 of 感触……汗の匂い……それは昨年夏、南アルプス登山中、増水した川の渡渉で、あの男の感触と汗の匂いだった。

幸福で嬉しいこと、正の部分のみで、成り立っている人間なんて存在する筈がない。存在したとしても、その人間の魅力は無いに等しい……だから、誰にも理解されなくつても二人の愛を貫こう！　と言つた彼。真剣な眼差しに戸惑いながら、
《一つの愛が成り立つそばで、とてつもない憎しみが起こる、そんな愛はいやなの！》と叫んだ自分を思い出し、夏代の目に新たな涙が溢れた。

ツアーも残り二日となり、今日の観光は一変して標高約二千メートルにある自然の湖・天池だった。ここ数日、日中の気温が四十度達し、バテ気味だった一行は、天山山脈の奥に導かれるにしたがって展開する自然林や、合間にあるカザフ族のパオや羊の群れに疲れを忘れて、誰もがシャッターを切っていた。やがてバスはパオが数組ある所で見学となり、全員歓声をあげながら車外に飛び出した。そして、カザフの民族衣装に着飾った男女に導かれてそれぞれのパオに向かった。

神田明はツアー客の最後尾に付き、一番奥に建てられているパオに向かった。前を歩いていたのは高畑久美子だった……あれ！夫婦が別のグループに入ったのか？……それに娘もいない。この時感じた違和感は、その後のスケジュールの中で―湖一周遊覧―水上レストランでの昼食―帰路のバスの中で拡大した。父と娘が並んで座り、離れた座席に久美子が座った。「あら、どうしたの？」と聴かれて、「独身に戻ったの」と、苦笑いして答えていた。これを聴いて、神田明は、帰国直前に『単独インタビュー』のチャンスがめぐってきたと思った。彼は、取材の過程で、高畑昌文達がシルクロードの旅に行くことを知り、監視を兼ねて参加したのである。

高畑夫妻と長女の三人は山梨県から参加し、ホテルや招待所（当時、地方にはホテルに代わって招待所がその役割を果たした）では、三人一部屋で、中学生の直子は、三十二名の中で一番若く、皆から可愛いがられていた。高畑昌文は五十七歳で、商社の役員。一方、専業主婦の久美子は三十八歳で、夫婦の年齢差は大きい。それもその筈で、昌文は、部下であった大出久美子との不倫を長年続け、不倫三年目に子供さえもうけた……それが直子である。これだけの話なら世間にもまにあるが、高畑夫妻の結婚に至る経過や、高畑昌文の前家庭の複雑な事情は複雑で、深刻さが漂う。特に高畑昌文の人間性を疑う。

高畑昌文・茂子の長男・信男は、一九七〇年に首都経済大学経済学部入学した。二次次に、学生自治会のクラス委員委員に押され、以降、全学自治会委員（ほとんど、過激派である共産主義マルクス派）としてのし上がり、学業専念を放棄し、活動に専念していった。七二年秋の国際反戦デーでは、デモ指揮をして、東京都

安条例違反で逮捕され、以降、両親との折り合いが悪くなる一方で、その年の暮れには家を飛び出し、アジト暮らし―過激派闘士の道を歩み、三年後には、党派の中堅幹部までのし上る。逮捕歴三回。留年すること二年、六年次の春、他校へのオルグへ向う途中、対立する党派（革命的中央派）の待ち伏せ襲撃に遭い、頭部を強打され、六カ月の入院するも完全回復ならず、時おり襲う頭痛と、意味不明な言動を発し、回復は絶望視された。

一方、高畑茂子は元目黒区職員であったが、七九年二月に脳梗塞にて死亡した。茂子には七六年より連続して『不孝』が襲いかかった。ただひとりの息子が、対立する過激派のテロで入院の繰り返しであり、息子を期待していた夫は、息子がテロに遭った後、息子との接触を避け、あげくに、密かに続いていた会社の元部下との不倫を妻に告白し、精神障害の息子を妻に押付け、一方的に家を出て元部下の女のもとへと走った。当然ながら、離婚をめぐる裁判に入ったが、元部下との間には九歳になる女の子がいることも発覚した。全く誠意を見せない夫の存在は、茂子の脳を破壊するまで進んだ。

母・茂子が脳梗塞で死亡した以降、高畑信男の精神状態が悪化し、近所の店から無銭飲食の苦情が相次ぎ、母の残した定期預金も下ろすこともならず、大田区は生活保護を認めることとした。また、母のお骨は、裁判の結論を待つて墓の購入を予定して、品川区にある知人の寺（安善寺）に一時預かりのままだった。慰謝料裁判の当事者の突然死で結論が出ず、寺ではそのままお骨を預かっていた。高畑信男は、八二年六月上旬、突然この寺を前触れなく訪れ、応対した住職の妻の証言によれば、聴いていた病状にも見ええず、ハッキリと「母に会いにきました」と伝えたとのこと。住職の妻は、出張中の夫に相談するまでもない、と思い、本堂の本尊の裏側におかれていた、高畑茂子の骨壺の前に案内し、その後は、電話や接客に追われ、二十分あまに後に行つたところ、高畑当人の姿はなく、骨壺も消えており、近くの床に骨の一部と灰が散らばっており、驚いて住職の立ち回り先に電話を入れた。寺に戻つた住職は、高畑の家に電話してみたものの、電話は不通状態で、次に住職は、一度、高畑の件で相談したことがある、大田区福祉部の某課長に電話し、高畑の自宅訪問と、お骨の確保を依頼した。

高畑信男は一週間後交通事故死した。はねたタクシーの運転手によれば『自分から飛び込んできた』とのことであつた―二重、三重の悲しみを背負つて、この

世を去った男―彼は、内ゲバで受けた頭の傷が、母と父の離婚（実父の、母と男に対する裏切り）の果てに母の死があり、男は、これを契機に、精神状態が更に悪化し、最後は、自殺に等しい交通事故により、現世に別れを告げた。彼の悲劇は、頭受けた傷以上に、父や父の愛人からの「人間性」を喪失した行為により、心が破戒されたのだ。

だが遺族に見舞い金が支払われた。何と見舞金三千万は、妻を捨て、死に追いやり、障害者の子を見限り、路頭に追いやった張本人・高畑昌文である！ さらに、一度は放棄した大田区内の家と土地を売り、残金一千数百万円を手にした。唯一の法廷相続人だと主張し、法は犯していなくとも《極悪人》そのものである。

高畑茂子の骨壺は、信男の持ち物の中になかったが、骨の一部が着ていたジャンパーのポケットに残っていた。また、口の中の残りカスに、それらしいものがあった。信男の死んだ後は推測のみが成り立つ―慈しみながら母の遺骨を食べたのではないかと……

神田明がフリーのルポライターとして数ヶ月、ニュースソースを追いつづけ、
《高畑夫妻の社会的抹殺》を狙った記事は九十パーセントできている。あとは《前妻と子息への謝罪と弁明》を取りたい。夫婦の仲たがいよ続け！せめて今夜だけでも……

今夜は、シルクロード旅行のさよならパーティだ。高畑久美子の隣の席を狙い、地元ワインを勧める……そして時期をみて、こちらの知っていることをチクリチクリと出すのだ！ まず夫婦を分断し、女を動揺させ、パニック状態に追い詰め、それから男だ。それからが本当の勝負だ。